

インタビュー

伊藤俊太郎氏に聞く

伊藤俊太郎氏略歴

- ◆ 一九三〇（昭和五）年生まれ。
- ◆ 一九四二（昭和一七）年、立教中学校入学、四七（昭和二二）年卒業。
- ◆ 一九四七年、立教大学予科入学。英米文学科に進学するが、心理教育学科に転科。五三（昭和二八）年、卒業。立教中学校に就職。社会科担当。
- ◆ 一九六五（昭和四〇）年、中学校図書館長として、立教学院百年史編纂委員となる。
- ◆ 一九八九（平成一）年、立教学院二五年史編纂準備委員（のち編纂委員）。
- ◆ 一九九五（平成七）年、定年退職。

立教中学校に入学するまで

——今回、おおむね一九五三（昭和二八）年、先生が立教の中学校に就職された前後から六〇年前後ぐらいいまでのお話を伺えたらと思っておりますが、その間の校長先生、それから教頭先生などの名前をそちらに記しました。

伊藤 佐々木先生、松下先生、花房先生、高橋先生。それから中学校の教頭としては、高橋先生が、教頭であったのがあとで校長になったわけですね。露木教頭。それから、中学校の事務長が大澤龍^{しげみ}先生。これでお作りになったということですね。

聞き手

鈴木勇一郎

編集

山中一弘
油井原均

注

伊藤俊太郎
山中一弘

(二〇二二年三月一九日収録)

——まだ抜けているところがたくさんあると思いますので、そこをむしろ補いながらお話を伺いたいと思っております。よろしくお願ひします。

伊藤 その年表を見ながら話を聞いていらっしやるとお分かりいただけると思うんですけども、新学制発足前後の……。これはいただいたお手紙に書いてあったことですね。

——はい、そのことです。

伊藤 予算など。それからクーデターの問題。校長専任制が採用された前後の校内の変化について。それから、池袋に高校があった時期の中学と高校の関係。高校の新座移転前後の関係。ちょうど高校が移転したのが昭和三年です。一応、今日のところを大体三五年までと押さえておかれるのは、ちょうどいいんじゃないかと思えます。

——ああ、そうですね。

——お生まれになったのはこのあたりなんですか。

伊藤 はい、池袋で生まれました。実はね、「親は」以前下谷に住んでいたんですが、関東大震災で焼け出されてまして、池袋に移ってきました。そのころ、池袋はまだ田舎でしたけどね。移ってきたのが大正一三年です。大正一三年ですから、つまり立教大学のこの校舎はあったわけですが、立教中学の校舎だった、壊してしまっただけ

館はまだできていなかったんですね。そのころ中学校は、築地で焼け出されて池袋の大学に同居して授業をさせていたんでした。そんなところへ移ってきて、私は昭和五年に生まれたわけですよ。

生まれましてからまだ幼児のうちには、お弁当を持って、母に連れられてよく立教のキャンパスへ遊びに来ました。誰が入っても別にとがめられないものですから、まだ三歳ぐらいのときからヨチヨチと立教に来て、こちらの中学の校舎や、大学の今、四号館のあるところはグラウンドになっていましたから、あそこで大学生がラグビーやっているのを見物したりしていました。

それから、四歳になってから忠信幼稚園という幼稚園に入園したのですが、そこは剣道を教えるところで、いつも立教大学の運動会ときには忠信幼稚園がよばれて大学生の前で剣道を披露したので、ずいぶん立教へは来ていました。忠信幼稚園は池袋の二丁目にありました。

私の家は、先ほどお話があったとおり、立教から歩いて五分ぐらいのところですよ。ですから、しょっちゅう来られていたわけですね。それでもキリスト教の学校だっということとは全然知らなかったんで。ともかく幼稚園を出て、豊島区立の池袋第五小学校という学校に入りました。それが今、第五校舎のあるところですよ、法学部の校舎の。

——五号館。

伊藤 五号館ですね。あそこに池袋第五（小学校）の建物があった。空襲で焼けてしまって、その焼跡を、後に立教が買いましたね。その小学校で六年生のときに太平洋戦争が始まった。小学校に入るときに二・二六事件があり、小学校二年生のときに盧溝橋事件があった。つまり、戦争の間で育った子どもなものですから、戦争っ子です。

そして小学校の六年を終わるときに、さて、中学はどこへ行こうかなと思っただんですけども、ちょうど盲腸をやりまして手術をしたものですからね。で、受験勉強がでなくなっちゃった。そうしたら、小学校の校医をやっていた木口先生という内科の先生が、「じゃあ、校医もやっていたんです。その木口先生が「じゃあ、俊ちゃん、立教に行きなさい。立教中学へ行ったらいいよ」というお話があったので、何ということなく立教を受けて、入りました。そのころは、立教中学校は筆記試験がなかったんですね。口頭試験だけで終わっています。それで何となく入ってしまった。

——その筆記試験がないというのは、その前からずっとそうだったんでしょうか。昭和十年代の戦時中にたまたまそうなっていたのか、その前から筆記試験がなかったのか。

伊藤 はっきりしていませんけれども昭和一四年、阿部内閣のころだったと思います。文部省の指令でもって筆記試験はいけないことになって、全国、公立も私立も全部、筆記はなくなっていたんですね。筆記をやっても構わないようになったのは、ずっとあとになりました。昭和二八年からです。ですから、それまでの間、ずいぶん長い間、筆記はなくて、口頭試験だけでもって入学試験をやっていました。

それで昭和一七年の四月に立教中学に入学したわけですが、そのころはもう戦争が始まっていましたので、アメリカ人などは全部、帰国してしまいました。帰らなかったポール・ラッシュは開戦の日に捕まって、それで送り帰されちゃったんですね。ですから、ポール・ラッシュもいなかった。ですから、私、中学生のときに、戦争が終わるまでは外国人というのを見たことありませんでした。もちろん立教では礼拝などはしませんでしたから、キリスト教の学校だということは全く知らなのまま、だんだんと学年が上がっていったわけです。

責任をとって死ぬ覚悟で

そのうちにだんだんと戦争がひどくなってくる。非常に軍国主義の配属将校で、立教をひどい目に遭わせた。これは大学の飯島信之という配属将校もそうだったろう

し、それから、中学校の柳田秀夫という配属将校もそうだったんですね。それでだいたい立教は苦しめられたはずですよ。

ほとんど戦況が悪くなってきましたね、昭和一八年の一〇月に徴兵猶予がなくなりますね。それでいわゆる「学徒出陣」ということでもって理科系がなかった立教大学の学生は、徴兵年齢に達したらば行かなければならない。文学部は休止か廃止かでもって動きが取れない。一応、経済学部はあったんだけど、それでも非常に人数は少ない。経営的に成り立たないから、そこで「立教理科専門学校」というのをつくって、どうにか息を継いでいたという状況でしょうけれども。

私はそのとき中学の三年生で、昭和一九年度の最初から、これも東京都からの指令でもって「学徒勤労動員」、通年勤労動員というのが始まります。昭和一九年の四月に立教中学校の五年生が勤労動員に出されまして、七月に四年生が生まれ、私ども三年生は一二月に生まれました。そのように学年でずれて出ているんですが、その間にもうサイパンが取られた。五年生が動員で出たときには、まだサイパンは取られていなかったわけですけども、四年生が動員で出たときにはもうサイパンは玉砕していました。それで、私が三年生として学校へ残って勉強をしていたときには、もうB29がマリアナ基地から爆

撃にやってくるような。私はですから、爆撃の中で工場に動員されていたんですね。一九年の一二月からです。それから戦争が終わるまで、動員されていました。

私がちょうど動員中にどんなことをさせられていたかということ、それと絡んで、教師になってから生徒に対してどういうふうに見ていたのかということをお話していただきたいと思うんです。

私が中学の三年生、四年生、五年生の三カ年クラスを担当してくださったのは、村井達三先生という先生でした。山中さんのときはいらっしやらなかったですね。

——いやー、存じ上げないですね。

伊藤 この村井達三先生とおっしゃる方は、私の中学五年間の生活のうちの三年間をクラス担任してくださったんですが、結局、クラス担任だから、工場で生徒が働いているときには監督をして、工場と生徒との間のいろいろな掛け持ちをしてやるのがクラス担任の立場だと思えますが、胃潰瘍が非常にひどくて苦しんでおられた先生で、欠勤が多かったですね。よく私には「伊藤、俺はこんな体だから、おまえたちを守ることはできない。工場にも出て来れないことが多い。だから、俺に代わって伊藤が友だちを守ってやってくれ。頼んだぞ」ということを、顔を合わせるたびに言われたんですね。

「先生が守れないのに、同じ同級生が守るといことが、

はたしてできるのだろうか。」空襲がほとんどとひどく
なってきたときですから、「爆弾が落ちてきたら僕
も死んじゃうので、友だちを守るっていうことはできな
いだらう。けどもどうしたら守れるか。僕の判断の誤
りでもって友だちが死んでしまうようなことがあった
ら、一体、僕はどういうふうに関係を取つたらいいん
だらうか」ということが、中学三年生の私には非常に頭
引つ掛かっていました。結局、いろいろ考えていると、
「もし自分が生き残つて、友だちが何人でも死ぬよう
なことがあつたら、僕は責任を取らなきゃならないな。責
任を取つていうのはどうするんだ。それは、責任を
取つてこちらが死ぬほかない。」死ぬつもりでもつ
つと工場に通っていました。ですから、戦争の終わ
りごろには、学徒の「義勇戦闘隊」⁽¹⁾というのに配属され
ましたけども、それで死ぬというよりはむしろ、友だち
に対して責任を負って死ぬんだというつもりで、戦争の終
わりまでいたんです。

戦争が終わりましたからは、それから解放されてほ
としたんですけども、それも八年間ぐらいで、中学校を
出てから教師になりました。昭和二八年に立教中学校に
就職し、翌年の二九年にクラス担任を仰せつかりまし
た。二年生の受け持ちでした。そのとき、私の受け持
った生徒は一クラスに六八人いたんです。非常に大人数な

んですけれども、それをいろいろと裁量していたわけ
なんです。

ちょうどその年の秋に、麻布中学校の「相模湖事件」
というのがありました。相模湖に遠足に来ていた麻布中
学校の二年生が、相模湖の遊覧船に乗ったら、定員過剰
でもって沈没して、二十何人か死んでしまったという出
来事です。ちょうど私が受け持っていたのも二年生だ
し、それでまた非常に「責任」というあれが甦つたわけ
です。「もし自分が受け持っている生徒が死ぬようなこ
とがあつたら、僕はとても生きてはいられない。親の悲
しみというものを見ていたら、とても生きていくわけ
にはいかないんだ」と。結局、クラス担任としては、い
つでも死ぬんだという覚悟をもってやっていました。
立教中学校で定年まで四二年間おりましたけども、その
四二年間、いつでも死ぬつもりで勤めていました。そう
いうふうなこともつて、定年退職してから初めて、
「生きていられたんだなあ」という気持ちになつたわけ
です。

立教中学校に奉職する

もう一つ申し上げなきゃならないのは、立教中学校に
なぜ教師として来るようになったかということです。私
の書いたものにも名前は載せておきましたけども、実は

中学の事務長をやっておられた大澤龍⁽²⁾先生は私の中学一年のときのクラス担任でした。それから、高橋昊⁽³⁾先生。後の中学の校長です。次の露木昶⁽⁴⁾先生。これは中学の教務主任です。私は大学生当時、中学生の家庭教師をやっていたんですが、露木先生は、私が家庭教師をやっていた生徒のクラス担任だったんですね。それでしばしば子どものことでもって色々相談に伺っていましたから、それでもいいぶん露木先生とはいろいろと面が通っていたわけです。その生徒が非常に英語がよくできるようになった子で、高松宮杯の全国英語スピーチコンテストに出たんですね。そのときに、高橋先生も露木先生も英語の先生ですから、高橋先生といろいろと相談しながらスピーチコンテストに、自分が教えていた子どもを出した。そういうようなことで高橋先生⁽⁴⁾ともいろいろと親密になっていたわけです。しかも戦後、私が中学校の五年生だった時、立教中学校の自治活動である「学校市制」というものの一つを担っていたものですから、高橋先生とはその市制ということでも非常に行き来があったんです。

というようなことでもって、私が大学を来年卒業するというときになって、立教通りで大澤龍先生とちよっとお会いしたら、「卒業したら立教中学に来ないか。自分の母校の教師になったら、こんな良いことはないじゃないか」とおっしゃった。また、高橋先生からも、「卒業したら立教に来てもらいたい」というお話だった。お二方からそういうお話があったものですから、公立の中学校かなんか就職するつもりで盛んに履歴書を書いていたんですけども、立教から声がかかったので、これはありがたいということ、早速、立教に行かせていただくことになったんですが、露木先生だけが反対なされたのだそうです。

あとで露木先生から伺ったんですけども、「伊藤を立教の教師にするということは異存はない。ただ、あいつは立教で育って、立教しか知らない人間だ。立教しか知らない人間では困るだろう。あちらこちらを見てから立教に来るんじゃないけども」と言って露木先生だけは反対なされたそうです。そうしたら高橋先生が烈火のごとくお憤りになって、「もし伊藤がよその学校へ就職して、向こうで離してくれなかったらどうするんだ。来れなくなっちゃうじゃないか。だからまず真っ先に立教中学へ引つ張れ」ということでもって。結局、露木先生は真っ先に引つ張ることに反対だったのだけども、高橋先生と大澤先生で当時の花房主事⁽⁵⁾に話して、お決めにされたんですね。ということ、私は、ありがたく立教に勤めさせていただいて、それから四二年間、立教で勤めていたわけです。そんなことで立教にいて大変うれし

かったということがございます。

——履歴の件で確認させていただきたいことがあります。昭和二二年の三月に中学校を卒業される。予科に進学されるわけなんですけれども、この時点では旧制ですよ。

伊藤 はい。

——二四年の四月に大学に入学されたわけですね。

伊藤 昭和二四年ですか。

——大学は新制大学になってからですか。

伊藤 予科を二年やりました。その次に大学が新制になったんです。それも一斉に大学が全部新制になったんじゃないくて、下級生から順に新制になっていく。予科を二年やって、そのあとで私は新制立教大学文学部の英米文学科に入りました。それで英米文学科で二年やりましたら、先ほどちよつとお話しした、私が家庭教師をやっていた生徒が、立教中学の社会科の先生に反抗して、白紙の答案を出したんです。それでずいぶん問題になった。私に対しては非常に素直な子どもなのに、どうして教師に反抗するようなことになったのだろうと。いくら考えても分からないので、心理学をやらなきゃとても分からない。英語はやってられないと。ちょうどそのときに心理教育学科ができたものですから、菅岡吉先生にお願いして転科をさせていただきました。で、心理教育学

科で卒業したということになります。

——もう一度確認すると、まず予科というのは旧制で入って、そのあと大学は、ここの時点で新制に切り替わったということですね。

伊藤 そうですね。

——それも文学部の英米文学科から途中で心理教育学科に代わった。これが基本的な履歴ということですね。

伊藤 はい、そうです。

——分かりました。

伊藤 ですから、私は、予科に入ってから立教大学を卒業するまで六年間あります。

——ええ。その件で確認させていただきたかったです。伊藤 そういうようなことで、あとはこちらにお書きいただいたのと経歴は一緒だと思います。

——そんなような関係でもって、いろいろ立教関係の先生方からお話を伺ったり、インタビューをして録音をとったりしたというのが私の一枚目のプリントに書いたものです。帆足秀三郎先生⁶⁾は私の中学時代の校長ですね。それから、大学関係で根岸由太郎先生というのは、偉い、古い先生ですけども、ここにある方の中ではウィリアムズに直接教わった、ただ一人の人です。この方は私が中学に就職したときに、まだ立教大学にいらっしやいまして、それでもっていろいろ話をしてくださった。根

岸先生が話してくださったことは主として、終戦のときにGHQによって追放された人がある。そのときにちょうど根岸先生は立ち会っていたんですね。ポール・ラッシュがやってきたときに根岸先生が立ち会っていた。そのことの話なんかをしてくれました。

ついでに、ちよつと下のほうにある阿部三郎太郎先生、武藤安雄先生、それから辻莊しやういちという先生がそのとき追放された先生の中に入らなくても、阿部三郎太郎先生というのが、私が立教中学生として一年に入ったときに私に家庭教師を世話してくれたんです。その立大生が、山中さんがインタビューなさった成田公一さんです。もっとも成田さんは、立教も昭和一八年でもってどさくさになっちゃって、すぐ慶應のほうに移られたと思います。

——そうでしたね。

伊藤 はい。それから、武藤安雄先生も英語の先生です。実は私の母の兄がクラシック音楽が大好きで、この武藤安雄先生もクラシックが非常に好きだった。その関係で武藤先生と母の兄、伯父が付き合っていたということで、武藤先生とも私は存じ上げているので、いろいろお話を伺ったことがあります。武藤先生一人が、戦争中の大学の配属将校だった飯島大佐を良く言う方なんですね。あとはみんな飯島さんにひどい目に遭ったって言っ

ているんだけど、この武藤さん一人は、「飯島大佐はそんな人じゃない」というふうにおっしゃっていました。辻先生は心理学科の先生だったし、あとでまた森脇要かねもと先生も心理学科の先生です。立教小学校を作るときに、森脇先生はいろいろタッチなさっていたんですけれども、ともかくそんなことでもっているいろいろお話を伺ったということがございます。

——ちなみに、かなりの数の方がここに名前が並んでいるわけですけども、これは当然一度にやったわけではなくて、時代としてはかなり長期間にわたったものなんですか。

伊藤 インタビューをしたとは限りませんね。お話をしてくださって、少しずつ少しずつ頭に入っている。それから、○印が付いていますのは、インタビューをして録音をとった方です。

——必ずしも改まったインタビューというわけではなくて、折々に触れてその訾咳に接したということでしょうか。

伊藤 そういうことでしょね。普通に先生と生徒というような関係よりは、深くお話を承るときがあったというふうになります。

——なるほど。例えば、佐々木順三院長(7)とか、松下正寿院長(8)とか、こういう方にもお話を伺っているわけな

んですが、これもやはりそういう……。

伊藤 そうですね。佐々木先生は私が中学の五年生のときに総長になっておいでになり、立教中学校の校長にもなられた方で、いろいろお話を伺ったことがございます。松下先生は元田作之進先生⁽⁹⁾のお婿さんですね。ただ、元田作之進先生は私が生まれる前に亡くなっていますので、直接にはお目に掛かったことはないんですけども、その二男さんの元田茂さんという方とはわりあい親しくしていただきましたので、そのときで松下さんとの関係も出てきたわけですね。

——話を少し戻すわけでもないですが、先生がちょうど中学校に就職された前後のことですが、先生が家庭教師をされていたお宅のご様子というのか。つまり、当時の立教の中学校の生徒は、大体どのような社会階層から来ていたのかなということもちょっと思っただけですけども。
伊藤 それも今、いろいろと調べているんですけども、全般的に言えば、いわゆる中小企業の経営者、または中小の商店の店主の家庭ですね。これは、そのうちにまた話に出てくるだろうと思うんですけども、大企業は極めて少ない。中小企業の経営者あるいは店主であれば、「大学だけ卒業すれば、あとは家を継いでもらえばいいんだから」というのが親の考え方ですからね。そういう点で、あまり突き詰めて一生懸命に子どもに勉強をさせ

なくてもいいというのが大方だと思います。

——大体そういう人たちというのは、どのあたりぐらいから通っている人が多かったんでしょうか。

伊藤 大体、豊島区が多いんですね。豊島区、板橋区、それから文京区あたりでしょうかしら。

——そんなに広域から来ていたわけではないということですね。

伊藤 そうですね。

立教小・中・高のちがひ

——この時期の学校の規模は一学年四クラスでしたか。

伊藤 私が教師になったときですか。

——はい、五三（昭和二八）年、五四年。

伊藤 一学年四クラスです。

——先ほどの話だと七〇名弱ぐらいが一クラス。

伊藤 そうですね。多いところで一クラス七二名、少ないところで一クラス六八名です。

——そのうちの二クラスが、ちょうど先生が学級担任をされる時点から立教小学校の出身者が入ってくる。

伊藤 昭和二九年ですね。小学校の第一回生が入ってきました。それが私が二年生を受け持っていたときの一年ですけどね、一年の一組と二組に二六名ぐらいずつかな、分けて入れられました。

——前に少しお話したときに、それまでの中学校の生徒とはだいぶ雰囲気違ったなんていうお話を伺ったような気がしますけども。

伊藤 子どもの雰囲気が違うことも違うんだけれども、それよりも、立教小学校から来た子どもたちが非常に面食らったようですね。

——むしろ生徒として入ってきた子どもたちのほうが。

伊藤 はい。それはつまり、新制の小中高がスタートしたときの状況を申し上げておいたほうがいいかと思えます。立教小学校は有賀千代吉先生（註）がお始めになった。最初の主事はミス・シエーファーですけども、ミス・シエーファーは半年で亡くなっちゃいましたから、あとは全部、主事は有賀千代吉先生でした。有賀先生は三〇年間、カナダでジャーナリスト的な仕事をしていらして、戦争の末期だかに日本に送り帰されてきた方なんですけども、日本に行きたくないっていうんで、シंगाポールで軍政のいろいろな手伝いをしていたらしいんですね。それで戦争が終わってから日本に来了。そこで有賀千代吉さんを一応、佐々木順三先生がよんで、「今度、立教小学校を作るに当たって、やってくれ」と。最初は教頭でやらせられたわけですね。

有賀先生の考え方というのは、つまりそういうことだから、三〇年間、いわゆる日本の考え方じゃないわけ

で、クリスチャンとしてもしつかりしていらっしやったんですけども、「神さまの子は純粹で無垢である。この汚れない子どもの魂をそのまま成長させて、戦争に負けた日本に役立つような人間にしていきたい」というのが、有賀先生の立教小学校に対する最初からのお考えです。ですから、非常にキリスト教を中心に育てられたし、同時に競争とか成績とかいうものは問題にしない。「おまえは成績が悪いからだめだ」というようなことは言わない。非常に良心的によくやれば、それでほめられる。成績で怒られることはない。そういうふうにして六年間、育ててきたわけです。

ところが、立教中学や立教高校では全然様子が違っていたわけです。まず高校をちよつと申し上げると、立教高校の中心人物である佐々木喜市先生（註）は、旧制の高等学校の校長をなさいました。それから、同じ佐々木だけども佐々木順三総長も旧制の高等学校の出です。そういうわけで両佐々木は、「高等学校であるならば旧制の高等学校のようなものになりたい」というふうに考えていらしたわけです。ですからそういう点では、小学校とは全然考え方が違っていた。中学はというと、立教中学は最も昔の立教中学校のカラーをそのまま引きずってきていたということですね。

つまり、昭和二三年に立教中学校が二つに分かれて、

下の三年が新制立教中学校、上の三年が新制立教高等学校になったわけですが、立教高等学校は、先ほど言ったように旧制の高等学校のような形にしようという主事の考え方だった。それに対して立教中学はどうだったかというのと、そのような、いわゆるフィロソフィはなかったようですね。つまり、「立教中学は下の三年間が新制の立教中学になったんだ」という程度の考え方だったようです。

——それがおそらく、例えば校章はもともとのものを引き継いでいるとか、伝統の「市制」が復活してどうのこうのとか、そういうふうな一連の、旧制中学校からの連続がかなり強い学校になったわけです。立教の場合はそうだったわけなんですけれども、もうちょっといろいろな学校を俯瞰して考えた場合、当然どの学校でも、旧制中学校もしくは高等女学校から新制の中学、高校に変わっていく。そうした場合、必ずしも新制中学校が旧制中学校の直接の後継者というよりは、どちらかと言えば新制高校が旧制中学校の後継者というふうな形をとっているところ、これは全部がそうではなくケースがかなりあるかとは思いますが、けっこう多いかと思うんです。どうして立教はそうなったのでしょうか。つまり、新制中学校が旧制中学校の影響を一番受けて後継者になっていったというのは。

伊藤 いわゆる旧制の立教中学校のときの教師のメンバーが、そのまま新制立教中学の教師になっていきます。頭の切り替えができなかったということだと思っています。しかも、名前は立教中学校である。立教高等学校や立教小学校とは違う。立教中学であるという名前がそうだ。それから、帽子の徽章、校章が変わらない。校章が変わらない。立教高校は徽章も校歌も校旗も変わっています。校旗も立教中学は変わらない。すべて変わらなかったわけですね。そういったわけで、おそらく先生方としては、特に新しい対処をするというような頭はあまりなかったんじゃないか。

——じゃあ、高校の教員というのは、旧制立教中学から新制立教高校にはあまり人が行かなかったというか、かなりそのあたり、入れ替わったんですか。

伊藤 結局、旧制の立教中学から新制の立教中学と新制の立教高校に教員を振り分けたんですね。ですから、立教中学の先生方は新制の立教高校へも行った人があります。例えば先ほどお話に出てきた村井達三先生だとか、あるいは斉藤達夫先生¹²、小木鐵彦先生¹³なんかは旧制の立教中学から新制の立教高校へ行った人ですね。

ただ、もう一つ言えるのは、新制の立教高校には立教大学からずいぶん先生が見えていますね。ですから、立教大学と立教高校との先生方で交換教授をやっているか

ら、相当雰囲気違ってきているんでしょね。それから同時に、こちらの立教中学のほうも、立教中学と立教高校で先生方が交換教授をやっていますから、したがって中学と高校の間で理解は相当とれてはいたんだけど、先ほどのように学校のいろいろな形が変わらなかつたところから、中学の先生はやっぱり旧制のままの形でもって行っていたということだと思います。

それからもう一つ、新制の立教中学の主事の花房先生はクリスチャンではない。国家神道ではなくて教派神道のご家庭なので、ついに最後まで洗礼を受けられませんでしたけれども。そういったようなことでもって、やっぱりキリスト教の学校という形があまり出てこなかったということですね。

——あまり出てこないということだと、例えば学内の宗教行事とかでも、中学校と高校ではかなり違いがあったんでしょうか。

伊藤 高校が新座に行くまではそんなに変わりませんでした。というのは、チャプレンが竹田鐵三先生^註で、最初のうちは小学校もすべて竹田先生がチャプレンをやったし、それから、中学も高校もチャプレンは竹田先生がやっていましたからね。したがって、いわゆる宗教行事的なものは竹田チャプレンが仕切っていました。ですから花房先生としては、キリスト教のことについて何ら口

を出すことはなかったわけですね。

——例えば週一時間、聖書の時間があるとか、そういう形で運営をされていたわけですか。

伊藤 そうですね。新制になってからの聖書というのは、竹田チャプレンだけでは足りないわけですよ。ですから、よその教会からおよびをしてやっていたのだと思います。あるいは立教大学の出身の司祭さんがほかにありますから、やってくれださったりということですよ。

——基本的には、教科のという用語弊があるかもしれないんですが、教諭の立場の人たちはそちらにお任せするとうような形だったわけですか。

伊藤 そうですね。一般の教諭は、キリスト教のあれに口を出すことはなかった。行事のときには参加しますが、でもね。ただ、ちよつと先のことを言わせていただくと、西村哲郎先生^註が立教中学の校長にられましたときには、「宗教教育はチャプレンだけがやるものじゃないんだ。だから、誰でもキリスト教のお話ができなきゃいけないんだ」という考え方で、我々もいろいろとキリスト教のお話をしなきゃならない。しなきゃならないというのはおかしいけど、そういう立場でした。また、小澤福夫先生^註のように、自ら買って出て聖書の時間を二年間か担当なさったという方もいらっしゃいます。

立教中学校と進学

——あと、ちょっと話は違うんですけども、この当時の教えていらした先生たちは、例えば非常勤の方とか、そういう形で中学校にかかわっていた方なんかはたくさんかだと、この時期、スタッフが確保できなくていろいろ苦しんでいるというようなことをよく聞くものですから。先生が就職された五三年前後からだいぶまたスタッフ確保は何とかなってきたということにもなるようなんですけれども、立教の場合は、つまり、教える人をどういうふうに取りクルートしていたのかということなんですけれども。

伊藤 大体教師の数が三〇人とすると、三〜四人ぐらいは講師、非常勤ということでしょうか。ただし、教師が三〇人として、その三分の一ぐらいは、立教高等学校と立教中学とがお互いに交換教授をやっていました。ですから、例えば先ほど話に出てきた小木先生だとか斉藤先生なんかも立教中学のほうへいらして授業をしていらっしやいましたね。結局、キャンパスが池袋ですから、ちよつと行けば一〜二分でもってお互いに行けてしまうわけですから。したがって、高校と中学の先生方の間は非常にうまくいっていたというか、お互いに理解が進ん

でいました。

それから言うくと、一九六〇（昭和三五）年に高等学校が新座へ移ってしまつてから、全く交換教授が利かなくなりました。したがって、お互いに分からなくなつちやつた。しかも、高等学校は規模が急に大きくなりましたから、どんどん新しい先生が入ってきて、池袋の学校のことは何にも知らないという方が新座の高等学校には多かつたわけで、お互いに高等学校と中学の間の関連が持てなくなりました。

——中学、高校、大学という学院内の各学校との関係の件なんですけれども、旧制の立教中学校から旧制の立教大学に進学するという率はそんなに高くなかつたわけですよ。

伊藤 はい。私書いたものもありますけども、あまり高くないですね。

——これが新制に変わる。で、佐々木順三院長の下で「一貫教育」というものが強く打ち出される。そして、先ほどからお話になつたように、中学校と高校、高校と大学で教員をある程度、交流しつつ一貫教育みたいなものを志向するようになったわけですが、そのあたりで進学の状況というのは変わったのでしょうか。

伊藤 中学から高校への進学のことではいいんですか。——はい、とりあえずは。

伊藤 とにかく、私もが立教中学生だったときと比べるとがらっと変わっておりますね。私もが立教中学生であった時代には、立教大学へ行きがたがっている者はほとんどなかった。一つには、生徒のニーズに応えられるような学部学科の数がなかったということでしょう。文学部と経済学部だけなだから、ということもありません。ですから、医者になりたいというような人っていないのは立教大学へ行ってもしかたがないわけです。ただ、牧師さんの息子なんかは、ずっと一貫でもって立教大学まで進んでいくというのが道だと思えますけれども。

ところが、新制になりましたからは「一貫」という言葉が初めて使われた。ことに立教中学に子どもを受験させようという親は、先ほど申し上げましたように、中小企業の経営者か店主です。だから、「大学さえ出てくれれば家の跡を継いでもらうから、それでいいんだ」と。専門は何でも構わないし、どんな大学でも構わないんだということになると、中学から高校、大学と一本で行けるということで、立教中学を受験させる親が非常に増えてきたわけですね。親がそういう気持ちですから、大子どもたちもそのつもりで来ていますから、結局、勉強してよそを受けるとか、あるいはよそを受けないままで、勉強をするという気持ちが非常に少なくなってきた。そういう子どもたちが立教中学、立教高校、立教

大学と行くわけです。おそらく山中さんはよく身に沁みていらっしやるんだろうと思います。ですから、確かに立教中学から立教高校へは九〇%ぐらいは進んでいたと思いますね。¹⁶

——今のお話から多少遡るわけですが、そうすると戦前の立教中学校ですね。先生は一七年入学ですから、そのころになると、特に高学年になると戦況が押し迫ってきたのでだいぶ状況が違うのかもしれませんが、基本的に立教中学校としては、ほかの学校に進むようにある意味、進学指導みたいなものをしていたということですか。

伊藤 そうしていました。油井原さんも進学のほうを調べただだいていると思いますけれども、小島茂雄先生¹⁷という大正から昭和にかけての校長、そのあとを襲った帆足秀三郎校長先生、お二方とも書いていますけれども、「立教中学校は生徒に勉強をさせて、公立の高等学校あるいは私立でも有名な学校の予科に入れる。それが目的なんだ」ということで、立教大学に入れるということはあまり考えていないようです。ことに小島茂雄先生の場合には、立教中学校を七年制の高等学校にするんだということを言っておられる。

ちよつと遡りますけども、立教がミッションからの経済的な援助がだんだん少なくなっていますね。しか

も、築地にあった立教大学は非常に小さかった。それが、池袋に移って大きくなった（一九一八年）。しかも大学令によって、いわゆる大学に昇格しますね（一九二二年）。それで急に大学の学生数が増えるわけですね。そうすると当然、授業料も多く入ってくる。だから、アメリカのミッシヨンのほうからの経済援助が少なくなっても立教大学としてはそんなに困らなかつたんですが、ところが立教中学校は、築地から池袋に移ってきてても依然として生徒数は増やさなかつたわけです。一クラス五〇名で二クラス、甲乙ですか。それでずっとやっていましてから、どんどんと経済的に苦しくなる。ミッシヨンからの援助がなければ成り立たなくなっちゃうわけですね。何とかして立教に生徒を集めるためには、立教中学校を受験校として育てて、なるべく多くの生徒に公立や早稲田、慶應なんかに進んでもらいたいんだと。これは帆船校長が『PTA会報』に書いていますけど、そういうふうな行き方でした。

——じゃあ、そういうための受験対策みたいなことというのとは当時、けっこうされていたんでしょうか。

伊藤 そうですね。私は戦争中だから受験も何もないんですが、戦争以前の人たちは、松本高校だとか、あるいは一高だとかというようなところをみんな受けていましたね。

独立採算制をとっていた立教

——今、授業料収入のお話が出てきましたけれども、立教学院のかなり大きな特徴として、各学校が独立採算で行くというやり方があるわけです。今のお話を聞いていると、ミッシヨンからお金をもらっていたときもそういう感じで、中学校なら中学校、大学なら大学という感じで別々にもらっていたということなんでしょうか。

伊藤 そうでしょうね。例えば関東大震災のあとで、それを救おうというのでミッシヨンからだいたいお金が来ますけども、立教大学には何ドル、立教中学校には何ドル、聖路加には何ドルというふうに最初から分けて持ってきてくれています。ですから、関東大震災の救援だけじゃなくて、その後も同じことだと思います。

ただね、立教女学院の場合は、本部の力が強くって本部で理事会を押しえていて、今度は講堂を造るんだつたら講堂に金を振り向ける、中学校の校舎を造るんだつたら中学校の校舎に、というふうには、本部が全部やっていた。ところが、立教学院はそうじゃなかつたんですね。ですから結局、だんだんと尻すぼみになってミッシヨンからの援助がなくなると、中学校、あるいは大学でそれぞれ金を工面しなければならなかつたということですから、ついでだから申し上げますと、戦争が終わってから、

経済的にインフレーションが非常に強いんですね。ここにありますが、大体昭和の初年と比べると、物価が三五〇倍ぐらいに上がっています。僕が中学生のときにわら半紙でできたノートを買うのでも、一週間で二倍ぐらいにノートの値段が上がってくるというふうなことになるんですね。こうなってくると非常に経済が成り立たなくなっちゃうので。立教中学はお金が足りないのです、昭和二〇年から何回か学費増額を東京都に申請しています。それでも戦争から戦後のひどい状態でもって東京都が振り回されているものだから、申請に対してなかなか返事がない。教師にも給料を出さなきゃならないので、大澤龍先生がおっしゃるには、しようがないから聖路加病院に行ってお金を貸してもらったということを行っています。聖路加はお金があつたんでしょね。

それから、有賀千代吉先生は、小学校はスタートするときはからなんらの予算も学院から付けてもらっていなかったと。だから、わら半紙一枚でも学院は出してくれなかった。そればかりじゃなくて、立教大学のほうから、「金が足りない。小学校は金持ちが父兄にいるから金があるだろう。金を貸してくれ」って言ってきたんだっていうんですよ。有賀主事の記事にも書いてあるんですけど、「大学でそういうふうに言ってきたからきっぱり断つた」というふうに言われています。立教小学校

の『十年史』に座談会が載っていますが、有賀先生が、「小学校を作るのに経済的な準備をしてくださらなかったんですか」って佐々木順三先生に聞いたら、「小学校だから安くできると思って経済的な準備はしていなかったんだ」というふうに座談会の中で答えていらつしやるんです。ですから、有賀先生もずいぶん大変だったと思いますけど、「ともかく、小学校だから父兄が黙っちゃいないよ。苦しければ父兄が何とか面倒を見てくれるから」って佐々木先生はおっしゃっているんです。

実際に昭和二三年から二四年になりますと、小中高と池袋に三校ありますから、一緒になってPTAがバザーを何回かやっているんです。それでもって少しでもお金を賄おうというのが小中高の行き方だったんですね。

小島茂雄校長の特殊な行き方

——先ほど、小島茂雄校長が、中学校を旧制七年制高校に改組しようという構想を持っていたというお話をなさっていました。私、不勉強でそのあたりよく知らないんですけども、けっこう昭和一〇年代とかにそういうふうに考えていたわけですか。

伊藤 いや、昭和一年にもう辞めちゃっているから。

——ああ、すみません。

伊藤 池袋に移ってきた当座からでしょうから、大正の

一三年ぐらいからだと思っています。

——けっこうそれは強く推していたんですかね。

伊藤 立教の本にも小島先生は投稿しているし、それから、ここにずっと名前がありますけれども、そのころの立教中学生はみんな口を揃えて言っています。それから、立教の理科の先生だった……。

——多田元一先生⁸⁸ですね。

伊藤 多田先生もその本『ひとすじの道』に書いていらっしやいますね。小島校長は七年制の高等学校にする予定だったということ。

——そうすると、立教大学の予科をどうするのかという問題がたぶん出てくると思うんですけども、どうなんでしょう。学内ではあまり賛同を得られていなかったということなんでしょうか。

伊藤 七年制？

——はい。

伊藤 ライフスナイダーあたりは非常にいやな感じを持っていたらしいですね。

その前にもう一つ、まだ築地にいるときにね、その当時、築地のあたりではほかに中学校がなかったんです、公立も。だから、大学が池袋に移った後に立教中学校を吸収して区立の中学校にしようという案が、区のほうから出てきたらしいんですよ。それが進んでいたらしいん

です。それはライフスナイダーやマキムに大きなシロツクを与えたいです。僕は聞いたわけじゃないけど、というのが本に書いてありますからそうでしょうね。——また別のところでいろいろな資料を読んでいたら、池袋の土地を買った。大学のキャンパスを作るのはいいんだけれども、中学校をどうするのかという問題がやはり出てきたようなんですよね。⁸⁹

伊藤 うん。

——当然最終的には池袋に持つていくことが望ましいんだけれども、当時の立教中学校の生徒というのは、日本橋区とか、京橋区とか、大体あのあたりが中心だった。そうすると生徒集めに苦労するんじゃないかということが、当面、大正の初めに池袋に移らなかった大きな要因だとしているものがあるんです。池袋と築地に分かれて、その後どうするのか。そうするとだんだん外れていく。外れていくというのは区立に改編をするとか、やはりそういう話も出てくるのかなという気がちよつとしましたね。これは感想なんですけれども。

伊藤 いや、それは言えるんだと思います。というのはね、当時、非常に交通事情が良くなかった。山手線が一回りしていなかったんですから。通うのに山手線もなかなか使えない。会社線もそうだし、いわゆる街鉄と言っていたんですが、市電もあまりなかった。いろいろ先輩

たちの書いたものを見ますと、立教大学のみならず築地にあった立教中学校の生徒も、乗り物に乗らないで徒歩で通つたらしいですね。ですから、明治から大正のころに掛けては、大体片道二時間ぐらい掛けて生徒は歩いてたらしいんです。そんなような状況のころに池袋に移つてしまった。大学生はともかくとして中学生はとも通いきれないということがあつて、中学は池袋に移るということをよしとしなかつたんだと思いますね。焼けちゃつたんで、しょうがないから移つた。そうしたら、帆足校長がおっしゃっていますけども、生徒の層がガラッと変わった。確かに、築地のほうに行っている京橋やなんかの人は、池袋へは通いきれませんか。

——これはなかなか証明というか、実証しづらいことだと思いますが、変わったというのには、有り体に言えばレベルが落ちたということなんでしょいかね。

伊藤 さあ、そのレベルはよく分かりませんが。

——いや、これはちよつと分からないことなんですけれども、やはりほかの学校でも、特に中学校の場合、郊外に移るといのは大きな問題で。例えば関西学院なんかは、明治一八年から神戸市のはずれの原田というところにずつとあつて、それが昭和の初めになって現在の西宮市のほうに移るわけですが、やはりそこで問題になったのは、中学校が移転をいやがったようなんです。

局、神戸市内の同じような層に固定した、ある程度、かつちりとした中学校に通つてくる層がいるのに、かなり田舎の西宮に移るのは反対だということ、かなり揉めたようなんです。大学の場合はそのあたりはそれほど問題にならないのかもしれないけれど、やはり中学校というのは、築地に置いてあるか池袋にあるのかでだいぶ変わってくるのかなという気がします。

伊藤 はい。築地の中学校では寄宿舎がありましたでしょう。相当数の生徒が寄宿舎で生活ができたわけですね。ところが、焼けてしまつて池袋ということになると寄宿舎のないところに行くんだから、通うのはとてもでさくないということなんです。

と同時に、同じようなことが言えるのは、立教高校の新座移転に際して、「新座に移るから一緒に移らないか」ということは縣長がおっしゃつたし、それから、松下総長も「中学も新座に行つたらいいじゃないか」と言つておられるんだけど、それに対して花房主事と高橋教頭が、「そんなことをしたら中学生は通いきれない。生徒数が減つちゃう」というので、頑として拒否したんです。だから、縣先生や松下先生の言葉を全部はねつけてしまつて、中学は池袋に居座つたということがあります。

——それは一九五〇年代ですから、昭和三〇年代にそ

いう話があったということですね。

伊藤 はい。「今の交通事情では」というふうには高橋校長は言っています。そのころは東上線もあまり本数はなかったんだし、まして武蔵野線なんかなかった。バスなんか実にもう怪しげなものですから。志木の駅から高校まで歩いていられないことはないんですけども、でもやはり当時は高校生が、志木の駅から高校へ行くのに、タクシーに相乗りして行ったというようなことでだいぶ問題にもなりましたけれども。

——でも、おそらくそういうところにあえて行ったというのは、先ほどのお話の中でも出てきましたが、新制高校をかなり旧制高校的に捉えていた当時の立教高校にかかわる人、縣主事とか、そういう人たちの考えがかなり強かったんだろうと思いますけれども。

伊藤 縣先生はね、少なくとも最初の一年間は全生徒を寮生活にさせたいということで、東寮が最初にできて、それから西寮と和寮ができました。でも、それだけでは一年生全員を寮生活させることはできなかったけれども。今、寮はなくなっちゃいましたもんね。

「学位詐称事件」と「チャペル事件」

——話がまた戻るのですが、これは直接体験されたことではありませんが、いろいろお話を古い方から伺って

る中で、例えば小島茂雄校長は、昭和一年に事実上辞めさせられていくわけです。

伊藤 はい。

——そういうふうな事件と、例えば旧制七年制高校を作るんだとか、やはり予科を置いてどうするんだとか、学校運営の進め方と関わり合いがあったのでしょうか。それとも全然違うところに火種があったのでしょうか。

伊藤 小島さんの辞めなきやならない理由ですか。

——ええ。

伊藤 それは学位詐称ということですよ。小島さんは文学部長も兼ねていたのかな。その年の夏に選挙が行われて学長になるおそれがあるということで、当時の学長を支持する人たちが、「小島を今のうちに蹴落としておこう」ということだったようなんですね。ですから、まず昭和一一年の早いうちに学位詐称ということを言われて詰め腹を切らされた。ご覧になったと思いますけれども、小島校長の直筆の履歴書でも「マスター・オブ・フィロソフィの学位を受く」と書いてある。だから詐称事件は、ほかの人がやたらに嘘を言って小島を陥れたんじゃないんですよ。

高橋校長という人は小島校長の甥ですから、そのことをちよつと伺ったら、「うん、それは確かに詐称にはなるよ。だけれども詐称するほうが悪いのか、それとも詐

称と言って騒ぐほうが悪いのかね」っておっしゃっていました。

——おそらく直接の引き金はそうだと思います。そうすると、今、「騒ぐほうが悪いのかね」という言葉があったというお話ですが、たぶんその前から小島校長は「俺はマスターだ」ということを言っていたわけです。でもそれはずっと問題にならなかった。なぜこのときに問題になったのかというと、学長になるおそれが出てきたからということなんですけれども、小島校長・文学部長に学長になられては困るというふうな人たちがいたということですよ。

伊藤 そうだろうと思いますね。当時の学長は木村重治先生²⁰でした。これがのちに「チャペル事件」というのを起こしてしまうんで、これも詰め腹を切らされた。結局、木村学長のご勅語の読み方がまずいということ、今度は小島派の連中が復讐として騒ぎ立てて、立教大学の全学生のストライキにまで持っていったんだというふうに言われているようです。その真相はよく分かりませんが、せんけども、ありそうなことではあると思います。

——そうなんです。チャペル事件であるとか、小島校長の学位詐称の退職事件とか、勅語の奉読の問題であるとか、そういうことが直接の引き金であることは間違いないのですが、その背景の対立軸として何か想定できる

のか、よく分からないところがあります。今、お話を聞いていて、例えば七年制高校を作るとか作らないとかいうようなことは一つ、学校の全体の在り方、運営の在り方にもかわり合いのあることなので、もしかしたらそれともかわり合いがあるのかなとちょっと思い付きで思っただけなんですけど。

伊藤 小島先生というのは非常に敵の多い方だったようです。久保田何と言ったかな、築地で教頭をやっておられた久保田先生²¹という方が書かれたものを見ますと、「小島君のあの性格では和がとれないから具合が悪い」というふうに書いている本があるんですね。実際に小島先生は、生徒たちからは非常に慕われた方らしいけれども、すごいおっかない人で、生徒と取っ組み合いの喧嘩をしたというふうなものも評判になっています。ここに出てきた小島先生の時代の立教中学生の話を聞いていますと、「いい先生だった」ということだけでも、「非常に怖かった」ということですね。

しかも、小島茂雄さんという人は、司祭でありますけれども、司祭らしくないところがあるんですね。アメリカへ留学して、ジェネラル神学校とコロンビア大学で学び、帰ってきて司祭になったわけなんですけれども、実は立教中学に途中から入ってきた転校生で²²、出身は水戸なんです。水戸学で凝り固まった人なんです。水戸

学といえ、朝廷を尊崇するというあれなんでしょうけども。『大日本史』の流れですからね。ですから、キリスト教に受洗して司祭にはなったんだけど、司祭らしからぬところが非常にあった。例えば、立教を辞めてから、すっかりキリスト教を捨てちゃって大政翼賛会の幹事になったんだそうですね。それでキリスト教の葬式はしていない。すっかり立教とは一線を画してしまっただ方だということで、七年制とか、あるいは区立のことに少し色気を出したことなんかは、マキムやライフスナイダーからは、いい感じは持たれていなかったらしいです。ですから、小島を弁護するような発言はミッシェンの方々からは全然出ていない。

——当時の大学学長の木村先生なんかは逆に、敬虔なキリスト教の信者ということになるわけでしょうか。

伊藤 お名前は存じ上げていますという程度で、どんなような方かということは私自身は知らないんですね。ただ、昭和一年の夏に学長の選挙だか何だかがあるというので、最も木村学長を脅かす立場にあったのが小島茂雄であるということのようです。

「新制発足当時のクーデター」

——お書きになった『立教中学校首脳部の転覆を謀った新制発足当時のクーデター』という文章を読んでまいり

ますと、結局、戦後いくつかがゴタゴタが起ころうけれども、例えばクーデターで標的となった高橋昊^{ひろし}。当時は教頭。

伊藤 教頭ですね。

——はい。小島茂雄の……。

伊藤 甥。

伊藤 甥に当たるわけなんですね。

問題なのは、そこにAという先生の名前が出てまいりますけども、A先生と高橋先生はほぼ同時に立教大学の英文科を出ている。というような経歴でありながら高橋先生が重用されていて教頭にまで昇つているということに、A先生は心穏やかならぬものがあつたようですね。これはA先生から直接私が伺つたわけじゃないんですけども、いろいろなものを読んで付度するとそういうことになります。

結局、高橋さんはいわゆる血筋がいいんですね。小島校長の甥っこだから。それで教頭になった。どうも自分はなれそうにないからというので、追い落とそうというような話が出てきたんだろうと思います。それは私がまだ教師になったころも勤めていらしたBという先生がいらつしやいます、そのB先生が陰謀をめぐらしているところを私、聞いちゃったんですよ。

昭和二三年の二月に立教小学校の第一回生の入学試験があつて、そのときに身体検査がありました。私は予科

の一年で、その身体検査のお手伝いをしていた。そのときに中学校のB先生もお手伝いをしていた。そこでお手伝いをしながら友達に話していたのは、「高橋は追い落としてしまおう。生徒や父兄をこちらのほうに付けてしまえば、それができるんだ」と言っていましたね。私はどっちかというが高橋先生と親しいほうですから、それを聞いて、「とんでもないことだ」と思ったんで、早速、高橋先生に忠告の手紙を書いたんだけど、出すのがやっぱり気が引けたものですから、出さないで終わってしまいました。

そのあとで起こったのが、昭和の二四年から五年に掛けての、いわゆる私が「クーデター」と呼んでいるものです。だから、その中心人物はA。この人はのちに、これが失敗してしまつたときに立教の別の部局に移されまして、それから他の学校のほうに移されましたよね。それからBさんですね。

Bさんは、私、インタビューをして録音がとつてあります。Bさんに言わせると、インタビューの話では、いわゆるクーデターがボシヤっちゃってAは辞めさせられて、他部局に移された。それからCという体操の教師がいるんですが、そのCさんは首を切られた。「僕も危なかったんだ」というんですけども、それは花房先生から伺うと、「Bは泣いて謝つた。あまり泣いて謝つたもん

だから許してやった」と。高橋先生のことについている悪く書いたものは全部、花房先生が取り上げて焼却してしまいましたということでした。だから、そういった証拠になるような書類は全部、花房先生のほうに差し出したことよつて、一応、立教中学での首はつながつたということですよ。首がつながつて定年までいたんですからね。ずいぶんつながっているんですが、非常に授業のうまい方でした。

——結局、そういう人たちが、高橋教頭が重用されるのはよろしくないと考えていたわけですが、なぜ高橋さんという人が重用されたのかというと、先ほど言われていましたけれども筋目がいい。それはなぜなのかというと、小島校長の甥だからだと。小島茂雄という人はあいう感じの追い落とされて、そのあと立教との関係が断つわけですけども、何と言つたらいいんでしょうね、やっぱり小島という人を支持していた勢力というものもそのあとずっとあるということなんですか。

伊藤 当時の立教中学の教職員の中では、反小島派というのになかつたと思います。ですから、支持していたということになるでしょうね。

——なるほど。中学校の中が割れていたわけではなくて、中学校はかなり小島校長が掌握していたと。

伊藤 そうですね。その当時、配属将校をやっています

た児島義徳という大尉さんがいたんです。その方と僕は面接しているんですが、そのときのお話によると、「小島校長というのは非常にいい方だった」というふうにしてその配属将校は言ってますね。ですから、いわゆる張り合う立場にいる人から見れば、こんないやなやつはなかつたんだらうと思うんです。それは築地の時代にもいろいろ書いたものの中に、小島のことを非常に悪く書いてあるものもありますから。だけど、張り合う立場にいたのであれば、いい人だったんじゃないでしょうか。

高校の新座移転前後の中・高関係

——先ほど、新制中学校ができたあとに、中高で教員をある程度交換して授業を分担していたというお話が出ましたが、「中高連絡会」というものがあつたわけなんです。これは具体的にどういふことを話していたんですか。

伊藤 例えば同じキャンパスで一二号館なんかは中学も使っていたわけですね。だから、一つの建物を中学と高校で使う。それから、神学院グラウンドと言っていた向こうのグラウンドも中学も高校も使う。そういうようなところで、その点をよく話し合っておかないといふいろいろな故障が出てくるおそれがあるということですね。中

学、高校の全教職員が出るのが原則だったんですが、実際には中学、高校の主事と教頭と事務長が中心になって、それから多少、中高の希望者の教員が出るというような形であつたようですね。しかも、その延長みたいな形で毎年一回か二回、中高の全教職員が温泉に行つて旅行をしてきた（笑）。

——親睦。

伊藤 親睦旅行ですね。今は全然ないですけども、その当時は親睦旅行をしていました。

——中高連絡会というのはその後もずっとあつたんですか。それとも、例えば新座に行つた時点でなくなつた。

伊藤 新座に行つてからなくなりましたね。

——そうすると、中学校と高校との関係という点では、新座移転というのが大きなターニングポイントになる。

伊藤 決定的だと思えますね。それは教師だけじゃないんです。生徒もそうです。というのはね、立教中学で昭和の二六年に文化祭があつた。それは立教高等学校が文化祭をやるので、中学もやらないかということで、それに乗つかつて一緒にやつた。それが立教中学としては第一回の文化祭です。それから毎年やりました。それから約一〇年間は、高校と共催という形で文化祭をやっていました。一月の二日、三日にやっていましたけど、そのときに指導は全部、高校の学友会の生徒さんたちが

やってくれたんです。

つまり、中学一、二、三年生ってまだ子どもですね。だから、高校の三年生が中学生にいろいろアタックして、指導をしてやってくれた。非常にやりやすかったです。私はそのころは立教中学の地歴研究部の副部長、それから文芸部の副部長をやっていましたからよく分かってんですけども、私どもにそんなに苦労がなくて高校生が全部引き受けてやってくれた。中学生を動かしてくれた。ところが、新座へ行ってしまっただけはそれがなくなっちゃったんですから。高校生が中学生を指導するということが一切なくなっちゃったわけです。だから、教師の歩調がうまく取れなくなっただけじゃなくて、生徒としても指導してくれる者がなくなっちゃった。我々教員が中学生を指導して、中学生が自立できるように持っていかなきゃならなかったんです。そういうふうなことでもって新座移転ということは、少なくとも立教中学にとっては非常に痛手だったと思います。

——高校が新座に行くと言い出したときに、中学校は何も言わなかったのですか。

伊藤 行くなとは言いませんでした。行ってしまえとも言わなかった。でも、「新座に行くから中学もどうですか」ということは縣先生から言われているんですが、花房先生や高橋先生はそれをきっぱりお断りになった。

——中学校は行かないと決めた時点で、中学校なら中学校なり、高校なら高校なりの、両校の間の関係をどう再構築するかという話はあまり議論にならなかったんですか。

伊藤 私の知っている範囲では、それは議論にはなっていない。お互いに関係が薄くなっちゃったということだけで、特に関係が悪くなったわけでもないから再構築もないですけど。ともかく高校がなくなっちゃったので、「我々は何とかして中学生を指導していかなきゃならない」ということのほうが強かったです。

——そうすると、課外活動とか、例えば先生でしたら文芸部とか、そういうところに顧問として指導をするのが、昭和三五年以前と以後とでは手の掛かりようが全く違ってきたということですか。

伊藤 そうです。

——昭和三五年以降はそちらに時間を取られるようになってきたと。

伊藤 はい。

——それ以前はむしろ、お任せという語弊があるかもしれないませんが、生徒に任せておくと結構なものが出てくると。

伊藤 そうですね。

「校長専任制」の功罪

——高校が新座に行くということがかなり大きかったということがあるわけですが、その前に、中学、高校を取り巻く大きな制度上の変化として、それまで院長が兼ねていた校長を専任化するということがありました。これはどうでしょう、変化というのはありましたか。

伊藤 「校長専任制」ですね。

——はい。

伊藤 結局、佐々木順三先生や、それから松下先生の初期のころは、そうとう総長のほうからいろいろと下の学校に言ってきてはいたんですね。それが全然なくなっちゃったということがありますよね。

——言ってきたというのは、どういうことをですか。

伊藤 例えば松下先生の場合、大学総長になってから間もなく中学校に来て、「中学は落第制がある。義務教育制で落第制があるというのはおかしい。落第制をなくしたらどうか」ということをおっしゃった。それに対して、そのころはたぶん高橋先生は教頭だったと思います。高橋教頭は、「いや、立教中学生は非常に軟弱なんだ。鍛えることによって一人前にしなきゃならないので、落第制をなくして甘やかすなんていうことはとてもできないんだ」ときっぱり断っていますね。

それからもう一つは、だんだんと中学の受験者が増えると同時に合格者も増やさざるを得なくなるんですね。立教小学校から最初は二クラス分が来た。そのうちに三クラス分が来る。そうすると、一般から取るのがそれだけ少なくなるわけです。でも、そう極端に一般から取るのを減らせないからというので、両方を合わせると非常に人数が多くなってくるわけです。そうすると困るのは高等学校なんです。立教高等学校では、毎年中学校から推薦してくるのを二七五に抑えたいんだと。それよりも多くなってしまうと、外部から取れなくなっちゃう。これは立教高等学校の言い分です。それに対して松下総長は、小中高の主事と教頭を集めて、「そうしろ」と。「以後、立教中学校は人数をそんなに多く取ってはいけません」というふうに言いましたね。松下総長の鶴の一声でもって、それ以後は極端に入学試験で外部から生徒を取るところを控えたんですね。

——ところが、院長が直接いろいろと方針を示すということがなくなってきたということなんですか。

伊藤 そうですね。

——専任制にするというのは、例えば理事会記録とか部長会記録とかを読んでいると、松下総長が……。

伊藤 忙しいからでしょう。

——主観的にはそういうところもあったわけですが、中

学校側としてもメリットがあつたということなんですか。

伊藤 そうですね。メリットはあつたと思いますね。松下さんが忙しいのは確かです。例えば原子爆弾の実験のことで、岸総理の代理としてしょっちゅうイギリスへ行っていましたしね。松下さんのおかげで立教大学もずいぶん発展したんですけども、それはそれとして、中学には松下さんのほうからかかってくる圧力が少なくなつたということは言えると思いますね。

私は露木教頭に伺つたことがあるんです。「戦後の立教の中で一番大きな出来事は何だつたですか」と聞いたら、「それは校長専任制になつたことだ。中学は中学としてやっていかれるようになったんだ」というふうに、これは露木教頭のおっしゃつたことです。

——ただ、その裏腹というか、もう一つの面として、昭和二〇年代の初めに佐々木院長の下でかなり一貫教育というものが打ち出される。そしてその中で、例えば中学校と高校、大学と高校とがかなり密接に関係をもつて教育をしていく。そういうやり方でいくわけですが、例えば高校と中学校との関係においては、新座に高等学校が移る。それから、中学、高校、小学と大学とのそれぞれの関係においては、校長が専任になつて中学校なら中学校のやり方でやっていくようになったということは、別

の面の言い方からすると、一貫教育としての質が変化してきた。

伊藤 そうですね。一貫教育の実質がだいぶ失われてきた。それは中学は中学としてやりよかつたと思います。それから、おそらく高等学校も高等学校としてやりよかつたんだと思うけども、一貫性はなくなつていますね。新制になつた当座は、立教高校は二年生から第二外国語をやっていました。ドイツ語やフランス語。それから、三年生は立教大学の図書館に行くことができたんです。それがなくなつちやつたですね。今、また新座のほうで図書館に行かれるんでしょう、立教高校は。

——たぶんそうなつていると思います。

伊藤 だから、佐々木先生のころは結局、まだ小学校が上がつてこないから、中学と高校は、生徒のほうも、それから教師のほうも非常に円滑に動いていた。それが、高校が新座へ行つてしまつてからは、実は中学としては相当苦しくなつたんだということは言えると思います。

——なるほど。

伊藤 だから、簡単に言つてしまふならば、校長専任制になつたところで、それは中学にとってはメリットだった。けれども高校が新座に移転したことによつて、デメリットが出てきたんだということだと思ひます。

カリキュラムにおける一貫教育の困難さ

——じゃあ、その後は移ってからというのは、高校との関係は薄くなる一方だったわけですか。

伊藤 一方ですし、それから、高校から中学に対する圧力が強くなってきましたね。大学から高校に対しては、ひどい卒業生を送ってよこすなという、非常に強いプレッシャーが行っている。そのプレッシャーの名残が、今度は中学にくる。中学からはそのプレッシャーの名残が小学校に行くという形で、下へ下へと圧力が行きましたからね。

——中学からの二七五人に抑えろというお話は、まだ高校が新座に行く前のことですか。

伊藤 新座に行く前ですね。

伊藤 それは立教小学校が増えたせいですか。

——立教小学校の定員が増えたんですか、そのときに。
伊藤 立教小学校は最初、昭和二十九年に〔中学に〕入ってきたときは二クラスだったんですね。それがその後、数年にして三クラスが入ってくるようになったわけです。

——立教小学校の定員が増えたわけですね。

伊藤 そうです。最初が八〇名。三クラスになって二二〇名になってきましたから。

——立教小学校の定員が増えるについては、それを受け入れなければならぬ中学校の了承とか、特にその間の話し合いというのはなかったのですか。

伊藤 少なくとも職員会議の議題にはなっていないでしたね。

——ならないんですか。

伊藤 はい。それは両校長、酒向校長と高橋校長の間の了解だったのではないのでしょうか。

——じゃあ、小学校の定員が増えて、それは当然、中学校が受け入れる。そうすると外からとれる人間は少なくなると。

伊藤 少なくなる。結局、小学校から来るのが四〇名増えますんでね。したがって外から取るのは四〇名減らさなきゃならないけども、四〇名はなかなか減らしきれないから、結局、一学年の人数が増えてしまつて、高等学校に迷惑を掛ける、ということになったわけです。

——そうすると、高校から大学に行くときにまたそういう感じで問題になるわけですね。

伊藤 そうですね。

——中高連絡会というのが、池袋にまだ高校がいる段階では、今の伊藤先生のお話だと、例えば校舎とか校地の利用の問題とかいうようなことでしたけれども、例えば教育内容だとか、あるいは教科ごとのつながりの問題

だとか、推薦の問題だとか、そういった教育の中身についてはなかったですか。

伊藤 私は毎回必ず出ていましたけども、私の記憶ではそれはなかったですね。

——そういう話にはならなかった。

伊藤 はい。

——そうすると例えば、中学校で習う課程と高等学校で習う課程というのは、けっこうダブリだとかがあると思うんですよね。例えば、いま多くの私立学校が中高六年制になっているのは、それを取捨選択してうまく精選すると、五年間で六年分学習できちゃうというメリットがあるからだと思いますが、そういうような教科ごとのつながりの話とかということには全くならなかったんですか。

伊藤 それはちよつと記憶にはないですね。

——そうするとある意味、一貫教育の実質があったということではないですか。

伊藤 いわゆる形のことですね、問題は。中身じゃなくて。

——それは私に言わせれば、中身としての一貫教育という実質はなかったということですか。

伊藤 うん。

——つまり、教育内容で話し合いとか調整とかということも

のが基本的になかったわけですよ。

伊藤 なかったですね。

——ということは、最初から一貫教育はなかった。僕はそう理解しているんですけど。

伊藤 そう言われればそうですね。さつき私は言わなかったんだけど、出てきたことは、修学旅行をどこにするかというような問題。「立教高校はここへ修学旅行に行きたいんだ。中学はここに来てもらっては困る」というふうに言われたことはありますね。

——だから、例えば中高が隣にいて連絡会が行われる環境にあるならば、科目によるとは思いますが、数学なんかは中学で習う三年間分の課程と高校で習う三年間分の課程をうまく調整すれば、ダブリを取っ払って、例えば五年で終えて六年目にもちよつと高度なことをやるとかということは、いまだこの私立でもやっていることですけども。あるいは、例えば中学校でこういう方向で教育をするから高等学校ではこの辺からうまくやってもらいたいとか、この辺は足りないとか、そういう教育内容の話がないということですよ、連絡会で。

伊藤 中高連絡会ではそういう話は出ませんでした。中学、高校の英語とか数学とか、各「教科部会」というのがあるんですよ。各教科部会でそういう話が出たかも分かりませんが、少なくとも中高連絡会では出な

かったし、また教科部会でも、社会科の教科部会ではそれは出ませんでした。

——社会科なんかけっこうありそうですね。中学と高校での教育内容について、例えば歴史なんていうのはうまく調整すればかなり、ただ、そうか、高校から入る子もいるから難しいかも分らない。⁸⁸

伊藤 そうですね。高校から入る人がいる。

——だから、実質的に一貫教育はなかったんですね。仲が良かったということはあったと思います。そして、高校の新座移転で連絡がなくなった。一番大きいのはたぶん、先生がおっしゃっていた高校生が中学生を指導できなくなったということ、それがきつと一番大きかったですよね。

——今、教育とおっしゃいましたけど、課外活動とか、教科外教育とか、そういうようなところでの連携が非常に強かったのかなというの、お話を伺っていて印象として持ちました。新座に行くことによって、結局、それもなくなくなったということですね。

伊藤 去年まで学院長をやっていた松平信久さん。あの方は中学時代に文芸部員だったんですね。で、高等学校で校友会の本部の委員長をやっています、松平さんは文化祭のときなんかにはずいぶん中学生の面倒を見てくれました。

——そうすると、例えば推薦問題で中学校が高等学校から比較的強い圧力を受け始めたというのは、小学校の人数が増えたときに一つあった。二七五人に抑えろと。それからあとと大学からプレッシャーがあるのでまた高校からプレッシャーがくるようになったというのは、新座移転後のことですかね。

伊藤 そうですね。と同時に、中学から高校に送った者の中にずいぶんひどいのがありましたね。それで、高校から文句を言われて当然だと思っただけでもありますか。

伊藤 ありますね。ここには書いていなかったと思うんですけど、昭和四〇年代の初めのころまでは、立教高校を受けてよそから入ってきた生徒と、立教中学から上がったといった生徒では、立教中学から上がった生徒のほうが学力はあると、高校から言ってきました。

——四〇年代前半。

中高間の学力格差問題

伊藤 四〇年代の初めのころはね。ところが、四〇年代のころからガラッと逆転しましてね(笑)。立教中学のデータがきているわけですから、はっきりしている。「立教中学から来た者の英語、数学の偏差値はこれくら

い。よそから受験して入ってきた人は偏差値はこれだけ。どうなんだ」と。これは非常に厳しくなってきましたね。

どうしてそんなに変わったのかなって言ったたら、立教中学としてはしっかりしたものを送らなかつたっていうことが一つあるのと同時に、もう一つは、高校によそから入ってきた子の成績が上がってきたということがあります。

高校英語科の西村俊彦先生と話をしたときに、「立教中学から送ってきた生徒で現在完了が分からない子がいるんだよ。どうするの?」と言われたことがある。

——現在完了を作れないのが私のクラスメートにもいました。それどころか、アルファベットを順番に言えないのもいました(笑)。

伊藤 それはひどいねえ。それは小学生だって言えそうなものだけだね。

——今のお話を伺っていると、小学校の定員が大きくなった。で、中学校がちよつと大きくなつちやつた。そのころから中学校から高校に送る人たちのレベルがだいぶ下ってきたという傾向があるんでしょうかね。

伊藤 みたいですよ。

——ちなみに、これは今後、調べればいいことですからけれども、小学校は何で定員を増やしたんですかね。やはり

財政的に……。

伊藤 いや、器が大きくなったからですよ。最初のころ、昭和二三年に立教小学校ができたときには中学の木造校舎に同居してたわけですから。翌年に有賀先生が元の大学教練場に小学校の木造校舎を造られて、それから二年生も三年生も二クラスずつで来た。大きな校舎だけど、やっぱり二クラスずつ入れればいいになつちゃう。それで酒向先生⁵⁰のときに立派な鉄筋コンクリートの建物を造られた。そこで三クラスになつたんでしようね。

——なるほど。建物を造る設計の時点でも、つまり拡大計画みたいなものがあつたわけですね。

伊藤 拡大計画がなきやあ、設計には生かせないでしょうから、拡大計画はあつたと思います。

——なるほど。

各時代の事務長

——今、木造校舎の話が出ましたが、さきほどの本とかを読んでいてちらつと思ひ出したのですが、昭和二五年の三月に、昭和一六年に建てた校舎が失火でというか、燃えちゃつたわけです。これは真相はよく分からないけれども、放火じゃないかという話がある。結局、最終的には真相は分からなかつたわけですが、当時は、これが

原因じゃないか、こういうやつらじゃないかという噂みたいなのはあつたんですか。

伊藤 ある恨みじゃないかかっていうふうには考えられていたけれども、これは確たることじゃないから、うっかり口にはできないことですけどもね。でもともかく、あの木造校舎は火のない校舎なんです。大体最後まで電気が入らなかつた。

——電気が入らないというのはどういうことですか。

伊藤 電線を引いていないんですから。したがって授業のときに、薄暗くなつても明るくできないんですよ。それから、その校舎に職員室があつただけでも、その職員室も夜になったら電気がつかないわけです。で、昭和二三年に小中高のPTAがああ校舎でバザーをやつたんです。父兄から集まつてきた品物をああ校舎に入れていたんだけど、そのころ非常に盗難が多かつた。徹夜しなきゃなくなつちゃうわけだけでも、暗いんですよ。明かりがつかない。ろうそくを立てて、徹夜の張り番をしたという話も残っているぐらいです。だから、漏電で燃えたとは考えられない。

——あと中学校の事務長を長くされていた……。

伊藤 大澤龍先生ね。

——この方は最初のほうでお話が出ましたけれども、もともとは中学校の先生だつたんですか。

伊藤 そうです。帆足校長が昭和一六年に中学校を大きくしまして、クラスを増やしましたね。そのときに来られた方なんです。つまり、私が入学するよりも一年前に先生になっている。剣道の先生です。だから、戦争中はずっと剣道をやって、クラス担任もやっていらした。だけれども戦争が終わる間際になって、空襲が多いから、中学の事務所の石井孝事務長が怖くなつてもう学校に出てこれなくなつちやつたわけです。それで帆足校長が大澤龍先生に「事務長をやってくれ」とおっしゃつた。「私はヤットコのほうですから、ソロバンはとれないんです」と再三固辞したのに、「あんたにソロバンをはじめてもらうつもりはない。事務所で目を光らせてくれればいいんだから」って無理やりに押し付けられたんだつていうふうに、これはインタビューを録音したものがあります。それでなつちやつてから、そのままずっと定年まで事務長をやられたことになりました。最初は高校の事務長も兼任していたしね。

——当初は、事務長が兼任していたということは、事務室は両方一緒だったのですか。それとも、中学校の事務室、高校の事務室というのがあつて両方を行き来していたということでしょうか。

伊藤 昭和二五年に木造の校舎が焼けてしまつて、その年のうちに鉄筋コンクリートの校舎を造るんで

すね。中学の第一校舎です。そこに事務所があつて、事務長はそこにいたんですね。で、事務長は中学校の事務所にいて、高校の事務長も兼ねていたということです。

——なるほど。でも、本当にこの人が長いわけですね。昭和二〇年から昭和四三年。そのあとまた長くやる人になるんですか。

伊藤 中学は、石川俊夫氏が六八（昭和四三）年から七六年。柘原氏が七六年から九一（平成三）年に事務長を務めます。それから清水さん（九一—九七年事務長）です。高等学校のほうの事務長は、まさか新座では兼ねられないですから、高等学校が新座へ移ったときには事務長は代わっているはず。その後、岡田さん（六九（昭和四四）年—九五（平成七）年事務長）が事務長をやつたね。

——岡田さんという方は、高等学校が池袋にいたときから高等学校の事務のほうにいらしたわけですか。

伊藤 池袋にいたときの岡田さんのことは覚えていません。すけどね。名簿でも見れば分かりますよ。（五三—九五）

——はい、名簿を見てください。

伊藤 岡田さんは体育の先生だから。

——そろそろ二時間を回つたんですね。でも、あまり長くなつてもあれなので、今日のところはこれぐらいでと

思います。長い間どうもありがとうございました。

（二〇一二年三月一九日収録）

注

- (1) 義勇戦闘隊 沖縄が米軍の手に落ち、本土決戦が避けられないと断された一九四五（昭和二〇）年六月、政府は男一五〜六〇歳、女一七〜四〇歳の者をもって「国民義勇戦闘隊」を編成し、「徹底抗戦」「二億玉砕」を志向した。特に、勤労動員の命令を受けている学徒は、戦場単位で「学徒隊」に属し、戦闘訓練を受けた。
- (2) 大澤龍 一九〇三（明治三六）年、千葉県生まれ。県立千葉中学校卒業後、千葉修道学館、一九二六（大正一五）年修道学院で剣道を身につけ、以後諸学校で剣道教師を務める。一九四一（昭和一六）年、立教中学校教師となり、一九四五年、終戦直前に事務長に任ぜられる。一九六八年定年退職。
- (3) 露木昶 一九〇九（明治四二）年、北海道旭川町生まれ。一九三三（昭和七）年立教大学文学部英文学科卒業。第一高等学校教務課、私立明星中学校英語科教諭を経て、一九四六年立教中学校に移り、教務主任として学校の組織を整えた。高橋校長就任以後は教頭となり、一九七四年定年退職。一九八一一年逝去。
- (4) 高橋昊 一九〇六（明治三九）年、茨城県生まれ。関東大震災の中に挟んで、築地と池袋で立教中学校の生活をし、立教大学文学部英文学科を卒業。一九三二（昭和七）年立教中学校に就職。敗戦後、花房主事のもとで教頭・生徒部長となり、一九五九年校長。一九七二年定年退職。一九八五年逝去。
- (5) 花房正雄 一八九四（明治二七）年、東京生まれ。一九二二（明治

四五)年立教中学校を卒業して神宮皇学館本科に学び、一九一九(大正八)年母校立教中学校の国漢科教師となる。小島茂雄校長から『学友会雑誌』の編集を命ぜられ、これが築地時代は『塔影』、池袋移転後は『いしずゑ』と名を変えて戦争末期まで続いた。戦後、立教中学校主事。一九五八年「校長専任制」がとられると、定年退職までの一年間校長を務め、その後一九六三年まで講師であった。一九六五年逝去。

(6) 帆足秀三郎 一八九三(明治二六)年、東京生まれ。立教中学校に入學し、受洗。立教大学文科を卒業し、立教中学校英語科教諭、宗教主事、寮の舎監を務める。一九三六(昭和一一)年小島校長退職の後を承けて立教中学校校長となる。大学学監も兼ねた。終戦によりGHQの指令で追放される。追放解除後復職。中学校講師として聖書、英語を担当。一九六三年退職。一九六五年逝去。

(7) 佐々木順三 一八九〇(明治二三)年、東京生まれ。東京帝国大学文学部英文科を卒業。学生時代には信徒としてタツカーや須貝止の薫陶を受けた。一九一八(大正七)年以降、第六、第八、静岡、第一各高等学校の教授を歴任。大戦末期からは都立高等学校校長を務めた。一九四六(昭和二一)年、乞われて立教大学総長となり、「立教再建」に全力を尽くすことになった。一九四八年新制立教小学校を創設し、新制の立教中学校、高等学校を発足させ、これらの校長を兼ねた。一九五五年学院長・大学総長を退任。一九七六年逝去。

(8) 松下正寿 一九〇一(明治三四)年、京都市生まれ。一九一四(大正三)年マキム主教により堅信礼を受ける。一九二二年立教大学商学部卒業。翌年渡米してミネソタ大学など四大学で国際法を研究して帰国。一九二九(昭和四)年より立教大学教授。敗戦後、極東国際軍事裁判で東條英機被告の副弁護人を務める。一九五五年、佐々木順三の

後を承けて立教大学総長となり、小・中・高校の校長を兼ねたが、一九五八年「校長専任制」をとる。同年社会学部、翌年法学部の新設、横須賀市武山に原子力研究所を開設するなど、立教の拡大・充実に力を尽くした。一方、数々の政治的・国際的な活動を続けた。一九六七

年、都知事選に立候補するため立教を辞した。一九八六年逝去。

(9) 元田作之進 一八六二(文久二)年、九州久留米生まれ。大阪英和学舎の貸費生となり、ティンダ師より受洗。師に伴われて渡米し、ケニオン大学、フィラデルフィア神学校、ペンシルヴェニア大学、コロンビア大学に学ぶ。滞米一〇年。立教尋常中学校チャブレンとなり、「立教学校ミッション」を創設、「築地の園」を創刊。立教学院の組織が出来た一八九九(明治三二)年、立教中学校校長となる。一九〇七年専門学校令による立教大学が設立されると、中・大両校の長を兼ねる。大学の池袋移転により専任の大学長となつて「大学昇格問題」に力を尽くす。一九二三(大正一二)年、邦人最初の主教に指名され、同年一月大学学長を辞し、マキム主教より主教接手を受けた。一九二八(昭和三)年、逝去。

(10) 有賀千代吉 一八九五(明治二八)年、長野県生まれ。一九二〇(大正九)年立教大学商科卒業。満鉄に入社。ついでカナダのヴァンクーヴァーでジャーナリストとして長く活躍。帰国後、一九四八(昭和二三)年に立教小学校が開設されるにあたり、教頭、次いで主事に就任。一九六一(定年)で退職。一九八七年、逝去。

(11) 佐々木喜市 築地時代の立教中学校で教え、後に第一高等学校教授として佐々木順三と同僚であった。戦後、立教大学、東京高等学校で教鞭を執っていたが、一九四八(昭和二三)年、立教高等学校の発足にあつて順三総長に招かれて主事となる。一九五二年に定年で退任した後も講師としてとどまり、また池坊学園短期大学の学長ともなつ

- た。一九六六年逝去。
- (12) 斎藤達夫 一九一〇(明治四三)年生まれ。国学院大学を卒業して、立川の少年飛行兵の学校で教鞭を執った。一九四二(昭和一七)年、立教中学校の国漢科教諭となる。一九四八年新学制で中高分離したため、立教高等学校に移籍。一九六〇年から五年間教務部長。一九七一年から一九七五年まで教頭。一九七六年定年で退職。一九九二(平成四)年逝去。
- (13) 小木鐵彦 一八九七(明治三〇)年、東京生まれ。私立京北中学校を経て、一九二二(大正一一)年国学院大学を卒業。立教中学校に就職。昭和初年、一時九十九里浜で「白里学園」を開いたが二年で閉校。恵那中学校に赴任。一九三三(昭和八)年立教中学校に戻る。一九四八年、新制中・高分離に際しては立教高等学校に属し、教務主任。一九五三年には教頭となり、一九六二年、定年退職。一九七一年逝去。
- (14) 竹田鐵三 一九〇一(明治三四)年、東京生まれ。一九一九(大正八)年立教中学校卒業。一九二六年、立教大学および聖公会神学校を同時卒業。一九三二(昭和六)年、ボストン聖ヨハネ修士会、翌年ニューヨーク聖公会神学校で学ぶ。一九四六年、立教中学校チャブレンに就任。一九四八年新学制発足からしばらく、小・中・高三校のチャブレンを兼ねた。一九五一年には『チャベルニュース』を創刊した。一九六六年の定年後も講師として三年間とどまり、中学一年生の聖書の授業を担当した。一九八七年、逝去。
- (15) 西村哲郎 一九二五(大正一四)年、東京生まれ。湘南中学校卒業後、一九四三(昭和一八)年、海軍経理学校入学。一九四六年立教大学入学。文学部英米文学科に学ぶ。一九五一年渡米し、シカゴ大学で教育心理学を専攻。一九五三年カナダ・トロント大学トリニティカレッジ神学校に入り、一九五六年聖職接手を受けて司牧に従事。一九六二年帰国して立教中学校チャブレンとなる。一九七二年立教中学校校長となる。一九七九年、校長在職のまま立教学院院长、翌年立教高等学校校長を兼任するが、院長の職務に専念するために一九八三年高校、一九八五年中学校の校長を辞す。一九八七年、学院長を退いて、聖路加国際病院牧師となり、二〇〇八(平成二〇)年、逝去。
- (16) 立教高校へは九〇% 残りの一〇%、すなわち立教高等学校に進まなかった生徒は、都立のランクの高い高校や慶応高校、開成高校などを受験して進学した者、もしくは、立教小学校から来た者を含む、学力不足で立教高校へ非推薦となった者である。
- (17) 小島茂雄 一八八六(明治一九)年、茨城県生まれ。旧姓高橋。上京して立教中学校三年に入学。立教大学第一回の卒業生。聖公会神学院を卒業して渡米。ジェネラル神学校とコロンビア大学に学ぶ。帰国後、司祭接手を受け、一九一九(大正八)年立教大学チャブレン。翌年立教中学校校長。一九三六(昭和一一)年退職。一九七〇年、逝去。
- (18) 多田元一 一八九七(明治三〇)年、香川県生まれ。県立大川中学校を卒業して、一九一七(大正六)年東京物理学校本科に入学。一九二四年卒業して、翌一九二五年、立教中学校に就職。観測部の基を作る。一九三二(昭和七)年、立教を辞して北海道帝国大学理学部物理学科に入学。一九三五年卒業。翌年、東京物理学校教授。一九四一年、東京帝国大学第一工学部講師を兼任。一九四五年、東海工業学校校長。一九四八年、東海高等学校校長。一九七四年、東海大学短期大学部部長。東京都私立中高振興会理事など歴任。
- (19) 中学をどうするか…… タッカー総理は、米国聖公会伝道局に宛てた一九〇八(明治四一)年の“Progress and Possibilities at St.Paul's

College Tokyo」と題した報告書の末尾に「この計画には、現在の中学校を移転することは含まれていない。中学校は何年かの間はその（築地）にそのまま置いておかなければならない。今それを移転することは、大部分の通学生を失うことになる。その上、中学校は事実上、京橋、日本橋などの大商業地区に手が届く唯一の福音機関である。商業発展の新时代が開始されるこの時ほど、真理の証しが必要なことはい」と結んでいる。

(20) 縣康 一九〇六（明治三九）年、静岡県生まれ。東京商科大学卒業後、一九三一（昭和六）年より立教大学予科教授兼大学教授。ついで立教大学・立教理科専門学校教授。一九四八年、立教高等学校開設につき同校教頭、のち主事。一九五八年、校長専任制の施行にともない校長に就任。一九六〇年、高校の新座移転を実現させた。一九七一年定年退職。翌年、立教英国学院を創立。一九七三年まで同校校長。立教学院以外にも、香蘭女学校校長、理事を歴任。二〇〇〇（平成一二）年、逝去。

(21) 木村重治 一八七四（明治七）年、奈良県生まれ。一八九二年、立教学校第四学年に入学。一八九六年、立教学校専修科を卒業。米國に留学、ケンブリッジ神学校、ハーヴァード大学を卒業して、一九〇四年帰国。立教中学校、慶応義塾で教鞭を執り、一九一八（大正七）年、立教大学講師に就任。一九三〇（昭和五）年、立教大学経済学部長。一九三二年、立教大学学長。一九三六年、学長を辞し、啓明学院長に就任。

(22) 久保田富次郎 一八六四（元治一）年、上総国生まれ。初期の立教中学校に学び、一八九〇（明治二三）年、立教学校教授に就任。以後、立教中学校教頭、立教学院寄宿舎舎監、立教大学教授（英語・経済学）、立教大学商学部長、立教学院評議員を歴任。一九三二（昭和

七）年退職。一九四四年、逝去。未完の『立教大学小史』を遺す。

(23) 転校生 一九〇七（明治四〇）年九月発行の立教学院ミッション機関誌「築地の園」に、「文学会」の席上、五年生の高橋茂雄（小島茂雄の旧姓は高橋）が「Why I became a student of St.Paul's School」という英語演説を行った、とあるが、その内容が残っていないのが残念である。

(24) 中高連絡会 立教高等学校が池袋キャンパスで中学校と同居していた時には、中高連絡会は頻繁に行われていたが、一九六〇（昭和三五）年に高校が新座に移転してからは会の間隔が間連になり、参加者も両校の校長・教頭（教務部長）に限られた。

(25) 校長専任制 松下正寿総長は、就任当初は前任者・佐々木順三の方針を踏襲して、小・中・高校の校長を兼任したが、立教大学の拡張充実、更に松下が国際的な活躍を広げるにつれて、身辺多忙を極めたので、一九五八（昭和三三）年三月二六日の第四九回理事会の席上、「院長・大学総長としての仕事が忙しいので、精神的負担から解放していただきたい」と申し出て、兼任を解き、小・中・高の現主事を専任の校長として、五九年度から発足することになった。

(26) 社会科の調整 小↓中↑高↓大と一本につながる形であったが、推薦による進学だけでなく、各校が別個に入学試験を行って合格者を入学させているので、カリキュラムの一貫性を保つことが困難であった。中学校の社会科を例にとると、各年度に入学して来る生徒に(A)立教小学校より推薦されて来た生徒、(B)他小学校から立教中学校の入学を受けて合格した生徒、(C)さらに、帰国児童の特別枠で入学して来た生徒の別があり、(B)の中には、四教科の受験勉強をして来た生徒と、二教科の勉強しかしていない生徒があつて、それぞれの生徒の持っていた知識、基礎的な学力の差は極端であつたためである。この事に関

しては『立教フォーラム』第二号（一九九四年七月）の三九頁―四七頁に「カリキュラムにおける「貫性の困難さ」と題して伊藤俊太郎が詳述している。

(27) 酒向誠 一九二二（大正一）年、岐阜県生まれ。成城高等学校、立教大学文学部英米文学科を一九五一（昭和二六）年卒業。立教小学校、有賀校長定年退職の後を承けて一九六一年校長。一九七八年定年退職後は立教女学院短大の学長となる。一九九八（平成一〇）年逝去。